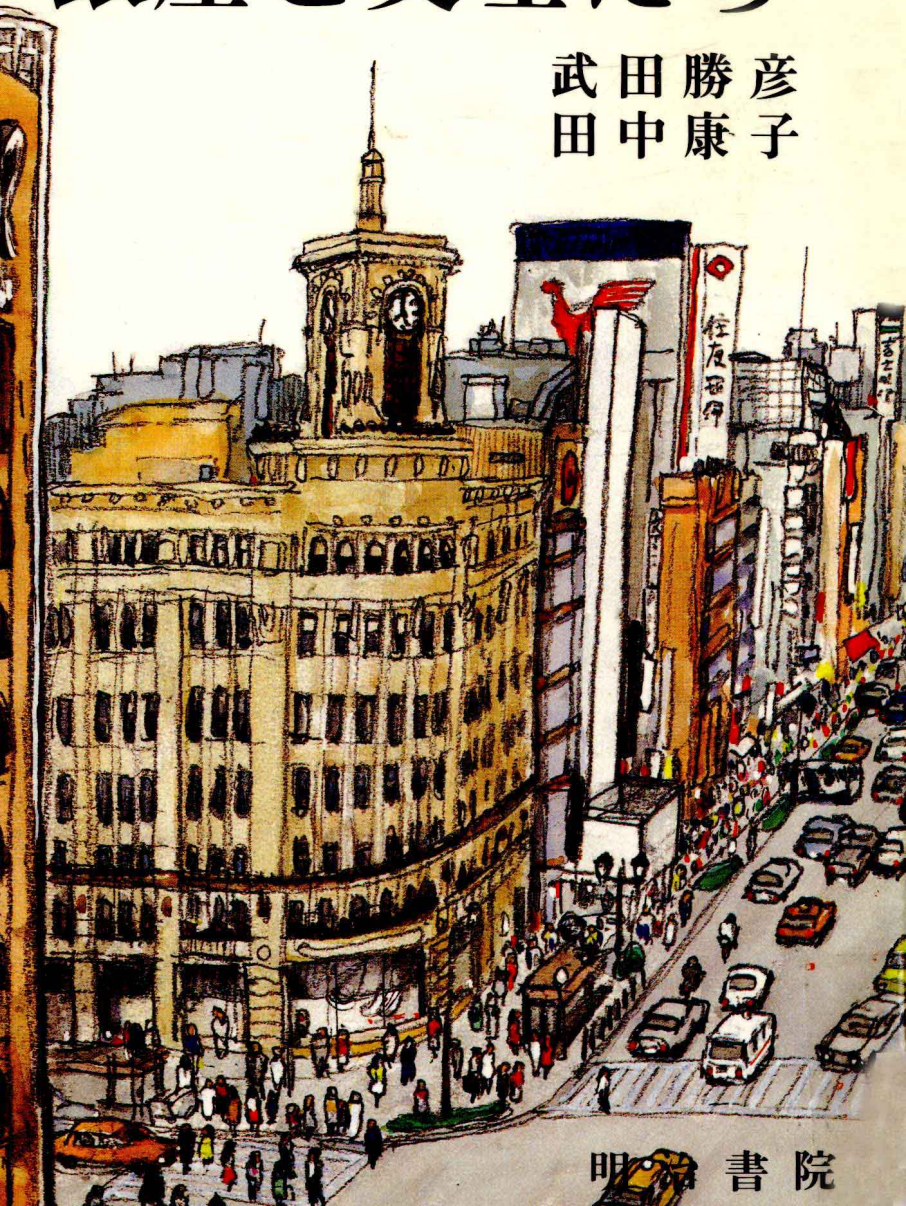


銀座と文士たち

武田勝彦
田中康子



明書院

銀座と文士たち

武田勝彦

田中康子

明治書院

著者略歴

武田勝彦 (たけだ・かつひこ)

昭和4年、東京市小石川区(現文京区)生まれ。上智大学大学院(修士)。早稲田大学教授。

著書に『荷風の青春』『日本文学問はず語り』『立原正秋伝』『比較文学の試み』など。

田中康子 (たなか・やすこ)

東京市京橋区(現中央区)銀座四丁目生まれ。泰明小学校、森村学園を経て早稲田大学文学部文学科仏文学専修。著書に『銀座は緑なりき』。「銀座——心のふるさとを行く」を『公評』に連載中

銀座と文士たち

定価 2,800 円
(本体 2,718 円)

平成3年12月5日 印刷

平成3年12月10日 発行

© K. Takeda & Y. Tanaka

著者 武田勝彦 田中康子

発行者 明治書院 代表者 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町 1-16

Tel 03-3292-3741(代) 振替口座東京 3-4991

ISBN4-625-48056-6

製本 正文社

目次

銀座の花道	一
江戸から東京へ——森 鷗外	二
江戸っ子の銀座——夏目漱石	三七
泰明の友垣——北村透谷 島崎藤村	四九
遊子彷徨——永井荷風	七一
老舗礼讃——谷崎潤一郎	一〇九
馬車のひびき——芥川龍之介	一三三
小商人の街——川端康成	一四九
詩歌は流れる	一八九
哀傷の街——太宰治	二三五
戦中・戦後世代の銀座——三島由紀夫	二四二
数寄屋橋を偲ぶ——井上靖 三浦哲郎	二六一

灯の下で——
遠藤周作
立原正秋

.....
二九

あとがき

.....
二九

索引

.....
三〇三

カバー・挿絵

山口景昭

銀座の花道



歌舞伎には舞台に向かって左寄りに、観客席を貫いて花道が設けられている。この道は俳優が舞台にかかる通路にもなっているし、舞台の一部として用いられる演劇空間でもある。

花道への出入り口になっている揚幕から七分、舞台へ三分のところ、役者は立ち止まって科白をいったり、見得をする。胸のすくような文句を聞かされたり、自慢の容姿を見せられたりすると、観客はひいきの役者を一声高く呼ぶ。「音羽屋」「成田屋」の威勢のよい声を聞くと、歌舞伎を見物に來ている陶醉感が倍加する。

花道がないと、「助六」で「おもひそめたる」で腰を伸ばし傘を片手で開く見得の面白さが失われる。「勸進帳」の弁慶の片手六法、あるいは飛び六法で揚幕に入る姿も楽しめない。しかも、花道は客席に設けられているので、役者と観客は空間的にも身近にいる。これが歌舞伎独特の臨場感を醸し出す。花道は能の橋掛りとは違う。能では舞台の役者と見所の観客が一体になることはない。歌舞伎では花道の両側の観客は、役者の向こうに自分と同じ観客の顔が見える。そのために、大衆の参加というか、観客の劇への同化がある。花道は歌舞伎本来の人間讃歌の機能を発揮させる役目を果たすものである。

私の子供の頃の銀座は大衆の町であった。木村屋に入って、「餡パン、おくれ」といえば一個が普通だった。「餡パン二個ちょうだい」などと、いくつか買う時だけ、個数をいったものだ。しかし、今は木村屋でパンを一個買う雰囲気がない。

横町でも、裏通りでも、二本棒の男の子がベーゴマやメンコをして遊んでいた。女の子はゴム縄や石けりをしていた。石をあらぬ方に蹴ったりすると、「お兄さん、石とって……」と黄色い声で頼まれることもあった。それを放ってやったり、手渡して歩いていくと、商家のおかみさんに、「お急ぎのところ、すみませんでしたね」と声をかけられ、母と娘の顔があまりにも似ているのに、はっとした。

銀座は夜よりも、昼の街であった。そこにはごく普通の生活空間があった。銀座の大通りが華やかな舞台で、そこに山の手の人も、下町の人も出掛けて来た。銀座の小商人たちは、大通りにゴミが落ちていれば、それを拾い、朝早くから打水をした。横町や裏通りでは、大道具・小道具を引きまわす人たちがいそがしく立働いていた。

この本は歌舞伎の花道である。七・三での名優、鷗外や漱石の見得や、藤村や荷風や潤一郎の名科白を再現している。読者の方々と筆者で花道を中心にして声を掛け合いたい。

銀座の範囲は、明治、大正、昭和の三代で大きく変化した。東京十五区時代に生まれた私にとっては、現在の銀座一丁目から四丁目までが真正正銘の銀座である。西は銀座教会やプラザンタンまでである。西の境界線は外濠川がなくなり、景観は変わってしまったが、今と変わっていない。数寄屋橋通りの南から新橋までが、現在の銀座五丁目から八丁目までが銀座であるのはわかっているが、それでも父や母のいい馴らしていた尾張町、竹川町、出雲町などが無意識の中で生きて

いる。竹川町は私が物心のつかないうちに、行政上は銀座七丁目になっていたが、漱石の「猫」に登場する亀屋はあくまで竹川町の亀屋として、私の胸の中に生き残っている。

共著者田中とは、特に銀座の東の境界に関して、意見のくい違いが多かった。歌舞伎座はあくまで木挽町の歌舞伎座であることで、二人の意見は一致している。現在はあの辺を歩いて、川の跡形もない。ところが、鷗外の「普請中」を論じる時、私は采女町を銀座でよいと思ってしまうが、田中は銀座ではないと主張している。

近代文学に就いても、私にとってはせいぜい荷風、潤一郎、康成どまりである。近代と現代の線はなかなか引きにくい。自分と同時代の作家になると、現代と誤ってしまいたくなる。近代も現代も相対的に決定される。ここでは例外はあっても、大正生まれというか、一九二〇年代生まれの作家を目安とした。

それでは近代はどこから始まるのだろうか。江戸から明治へと移り変わった一八六八年（慶応四年、明治元年）と答えることは簡単だ。しかし、その節目に、当時の銀座の人は近代になったとの実感は持っていたのだろうか。私は第二次大戦の敗戦の年の八月十二日に、銀座を歩いた。数寄屋橋通りを東に向かい、四丁目で左折し、一丁目の京橋に出、銀座一丁目河岸を歩いて、市内電車に乗った。十五日の午後は品川から東京へ省線電車で向かった。有楽町駅から焼野原の銀座を眺めた。その日は市ヶ谷に行くために立ち寄れなかった。翌十六日は、友人と日本橋から京

橋を渡り、四丁目まで歩いた。

現在、八月十五日あるいは十六日から新しい生活が始まったように記述している人が多いが、現実にあの日を生き延びた者には、明瞭な境界線はなかった。戦争が終わっても、毎日空腹だったし、靴には穴が空いていた。占領軍に対する恐怖におののいてもいた。ごく普通の人間にとつては、時は連続している。八月十六日から新しく変わったなどとはいえない。上層部では入れ替わりがあっても、一般庶民には大した変わりはない。もし新しい思想が古い思想を追いやってたにしても、生活そのものはどうということはない。

これと同じ現象が、江戸から明治に移向した時にも見られたに違いない。江戸時代二六五年間に築きあげられた慣習は、明治になって一気に払拭されたとは思えない。主従は三世、夫婦は二世、親子は一世との人間の絆は人と人の関係を重く規制していた。薩長の武士や京都の公卿や一部の政商にとつては、天皇は絶対であつたろう。西欧諸国のあり方から考えて徴兵令も当然の処置であつたろう。しかし、徳川家に仕えていた者や、江戸っ子には、天皇も軍隊も心から承服できるものではなかった。一般の人たちには、近代の意識はなかった。鉄道が開通しても、それが日本の近代化につながるとか、富国強兵と結び合うとは考えなかった。煙を吐いて疾走する陸蒸おか気に驚嘆しただけであつた。

一般に明治初期の文学は、江戸時代の戯作を継承した興味本位の娯楽読みものであつたといわ

れている。仮名垣魯文は、「虚を主とし実を客とし、或は事跡名勝を仮用し」といつているが、文学は本来そういうものである。小説は必ずしも高遠な思想を入れ込む器とは限っていない。ましてや、小説は社会学の教材にされたり、政治の宣伝に用いられては、たまったものではない。漱石の「坊つちやん」や「吾輩は猫である」などの小説は、あの茶目っ気たっぷりの魯文系滑稽本の特徴を継承していたからこそ、愛読者を得られたのである。

小説が男と女の間を生じる微妙な心理のあやを扱うのは至極当然のことである。ところが、江戸の人情本系統の恋愛讃歌は、明治五年四月に教部省から発令された「三条の教憲」によってかなりゆがめられた。

- 一、敬神愛国ノ旨ヲ体ス可キコト
- 二、天理人道ヲ明ニスベキコト
- 三、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキコト

この教訓が発せられるまでに維新から五年の歳月が流れている。歴史を読む人から見た五年は短い、実際に生きる者にとっての五年は長い。

この教条が発せられる前の明治四年四月または五月に刊行された小説に、仮名垣魯文の「牛馬安愚楽鍋」がある。魯文は歴とした京橋鎗屋町生まれの銀座っ子だ。魚屋の長男であったが、九歳で竹川町の諸藩用達鳥羽屋多吉に十年の年間で丁稚奉公に出された。鷗外や龍之介の章で取り上

げた銀座の通人、細木香以に眼を掛けられ、俳諧や和歌をたしなんだ。さらに、香以の口添えで戯作者、花笠文京に入門した。香以の血を引いている女性が芥川龍之介の養母である。芥川が銀座を舞台にした小説には、この母から口移しに語られた話が織り込まれている。このように文学の水脈というか地下水は深く庶民の間を流れているのである。

「安愚楽鍋」の文字もよく見つめると、ふざけているようでいて、意味は深長なことがわかる。人間は愚である方が心も安らかで楽しいからだ。この作品の中で、魯文は銀座の金春芸者に言及している。これは新橋芸者でも橋北金春といわれた区域の芸者だ。徳川家に仕えた金春太夫に南金六町の土地を与え、ここに住まわせたので、金春新道の名が生まれた。芸者の置屋のあった町は、南金六町、出雲町、日吉町、丸屋町、八官町、加賀町、宗十郎町、竹川町、南鍋町と現在の六、七、八丁目の西側になっている。これを総称して、江戸時代から新橋芸者といっていた。第八章で田中が銭湯金春湯が今でも健在であると書いている。私も先日、ここを訪れ、金春湯やわんや書店を眺め、人間の歴史は学校の教科書で学ぶものとは違うことをしみじみと肌で感じた。

明治十一年に『仮名読新聞』に連載された久保田彦作の「鳥追阿松海上新話」は銀座生まれの小説にふさわしく、尾張町あたりの描写がある。この新聞社は、この小説を連載し始めた頃は京橋弥左衛門町十番地にあったが、途中から新橋出雲町四番地に移った。

梅が香や乞食の家も覗かるゝと、晋子の吟の古き称えも新まる代の春立頃、東京は未だ江戸

と呼び、木挽町の采女が原に羽生の孤屋の板庇し、月洩軒の破損家に親子（中略）あり。其本夫定五郎は日毎に辺り近き尾張町なる布袋屋といへる呉服店の曲り門に履物直しの露店を張り、妻のお千代（四十二）と一女阿松は春は鳥追平常は、女太夫の笠深く、包めど匂ふ島田鬻、廿の上を二ツ三ツ、超と花香は市中に高く、大店向や勤番長屋の窓下にて、雀賀の節も仇めきて、玉を欺むく母娘其頃世上に小屋久米三と、人も門より呼子鳥。

現在なら、定五郎は靴直し、靴磨きに当たる。お千代と阿松は、テレビに登場する歌手である。采女ヶ原は周辺が木挽町になつても采女町として長く残つた特別な地域であつた。東側は築地川に臨む長方形な町で、北が木挽町三丁目、西が四丁目、南は五丁目と十丁目の一部に接している。ここには江戸末期に、貧乏な人たちが住む小屋があつた。この男たちの多くは、履物直しを業としていた。

布袋屋は現在の三愛と鳩居堂の一部ぐらいを占める尾張町切つての老舗であつた。ここから北に向かつてさらに亀屋、恵比寿屋と三大呉服店が並び、「江戸名所図会」の「尾張町」に描かれている。「暖簾の布袋の笑ふ角見世は実に福の神の来るやうなり」との狂歌にも歌われるほど繁昌していた。したがって、履物直しにはもつて来いの場所であつた。

阿松を毒婦物として斥けてしまうのには抵抗がある。太宰をのつびきならぬ立場に引き込んでしまった女給を、毒婦として片附けるわけにもいかない。幕末、明治と太宰の頃と現在では、

世相も違ふし、性の見方も異なっている。しかし、男と女の間流れる感情に違いがあったわけではない。「三条の教憲」以後、身を潜めていた戯作者が筆を取り始めた時、まず銀座四丁目、尾張町が作品に登場したことは見逃せない。

近代文学をどこから始めるかに関しては、田中と私の間で果てしない議論があったが、森鷗外からに落着いた。鷗外、漱石、透谷、藤村らの作品は、間違いなく古典として残る作品である。私たちの章立てもほぼ、生年順にすることで合意した。そして、この本が銀座の花道になるように心がけて執筆した。

江戸から東京へ
——森鷗外



yamaguti

現在の銀座七丁目を舞台として書かれた歴史小説が、「細木香以」(『東京日日新聞』大六・九・一一、一〇・一三)である。この小説には、江戸情緒が豊かに織り込まれ、文芸的な香気が高い。銀座の富商であり、通人である細木父子の暮らしぶりが細かく描かれている。江戸の文化を知り、銀座の生活を味わうには格好な作品だ。

山城河岸の檀那、摂津国屋藤次郎は、津藤で通っている。この呼称は、父の龍池と息子の香以に共通する。龍池(？—安政三)は雅号で本名は伊兵衛、香以(文政五—明治三)も雅号で本名は藤次郎だ。

山城町の酒屋摂津国屋の伊兵衛は自分と同じ名前の番頭伊兵衛を見込んで養子にした。期待に違わず、養子は店を蔵造にし、地所を買い足し、摂津国屋を山城河岸を代表する富商に発展させた。先代伊兵衛は七十歳近くになって隠居し、店の奥二階に住む。養子は大名相手の御用達業に転じ、これまで以上に手広く商売をする。龍池の雅号を持ち、遊び方も盛んになり、劇場に通い、妓楼に登る。取巻は深川の遊民が多い。龍池は杯は手に取っても、飲む真似をするだけだったし、妓楼に宿泊することはなかった。

この頃の銀座の檀那衆の取巻連への祝儀の配り方の描写は、いかにも考証家、鷗外らしい。まず、祝儀の金を奉書で包み、水引を掛ける。それを高く積んで置いて、一人ずつに渡す。

龍池の取巻の一人に為永春水がいた。春水が三鷺とか楚満人と称していた不遇の頃であった。